



文化財愛護
シンボルマーク

八頭町文化財調査報告書 1

鳥取県八頭郡八頭町
平成18・19年度

町内遺跡発掘調査報告書

2008・3

八頭町教育委員会

序 文

八頭町は、平成17年3月31日に郡家町、船岡町、八東町の3町が合併して誕生いたしました。鳥取県の東南部に位置し、東は若桜町、西と北は鳥取市、南は智頭町にそれぞれ接しており、周囲は扇ノ山など1,000mを超える山々に囲まれています。東西に蛇行する八東川流域には耕地が開けており、古くから農林業が盛んで、稲作を中心に、梨、柿、りんごなどの果樹栽培も行われています。

本書は、平成18年度と平成19年度に実施しました、河原インター線緊急地方道路整備事業に伴う試掘調査、農地造成に伴う北山2号墳の発掘調査、アパート新築工事に伴う試掘調査、町道北山志谷線改良工事に伴う試掘調査の成果を報告書としてまとめたものです。

本書が、郷土の歴史を解き明かし、また文化財を愛し誇りに思う一助となることを期待するとともに、これらの調査により出土した遺物についても郷土の歴史を語る資料として今後活用を図りたいと考えています。

調査にあたりご指導いただきました鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、地元関係者の皆様に対しまして深く感謝の意を表し、序文といたします。

平成20年3月

八頭町教育委員会教育長 西山淳夫

例 言

1. 本報告書は、国庫補助事業として平成18、19年度八頭町内で実施された、発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査を実施した埋蔵文化財の所在、遺跡名、並びに調査原因は次の通りである。
 - ①八頭町北山字野ノ前 北山2号墳、農地造成に伴う発掘調査
 - ②八頭町船岡字幸河宮 河原インター線試掘調査
 - ③八頭町郡家字大盗口分 アパート建設工事に伴う試掘調査
 - ④八頭町北山字六郎谷 北山3号墳、町道改良工事に伴う試掘調査
3. 調査体制は次の通りである。
 - ・調査主体 八頭町教育委員会 教育長 西山 淳夫
生涯学習課長 山本 教子 (北山2号墳・船岡河原インター線)
ク 前田 健 (郡家大盗口分・北山3号墳)
社会教育主事 野田 大和
 - ・調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター
 - ・調査主任 八頭町教育委員会委嘱調査員 道谷富士夫
(北山2号墳 船岡河原インター線、北山3号墳)
上田 哲夫 (郡家大盗口分)
 - ・調査協力者 今嶋 芳一、中島正太郎、西尾 秋夫、林 賢、古田 親憲、山崎 健治、
沢田 純一、高木 久夫、吹上のぶ子、鈴木佐智子、山根 利子、山根 笑子、
山根 善子、田村よし子、安住 武子、以後 藤枝
4. 本報告書で使用した方位は磁北である。
5. 標高は海拔標高である。
6. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の地図を使用した。
7. 本報告書の執筆、編集、挿図の浄書は次の通りである。
北山2号墳、河原インター線、北山3号墳 道谷富士夫
郡家大盗口分 上田哲夫
8. 発掘調査により作成された記録類、写真等は、八頭町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 本報告書における実測図は、図に付された縮尺による。
2. 本文、挿図、図版の遺物番号は一致する。

目 次

序 文

例言 調査関係者一覧・凡例

目次 挿図目次・図版目次

○北山2号墳発掘調査

- 1 発掘所在地と原因..... 1
2 調査の方法と概要..... 1

○河原インター線発掘調査

- 1 調査原因..... 5
2 調査方法と結果..... 5

○北山3号墳試掘調査

- 1 調査原因と方法..... 8

○郡家大盗口分発掘調査

第I章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る過程..... 10
第2節 調査の方法 10

第II章 調査の概要

- 第1節 大盗口分遺跡（八頭町郡家字大盗口分） 11

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図 P 1の前
第2図	北山2号墳石組図 3
第3図	北山2号墳出土遺物 4
第4図	河原インター線トレンチ一覧表 6
第5図	河原インター線トレンチ土層図 7
第6図	北山3号墳天井石平・断面図 9
第7図	調査地位置図 11
第8図	トレンチ配置図 12
第9図	T1・T1N S土層断面図 13
第10図	T1出土遺物 13
第11図	T2・T2N S土層断面図 13
第12図	T3・T3N S土層断面図 14
第13図	T3出土遺物 14
第14図	T4・T4N S土層断面図 14

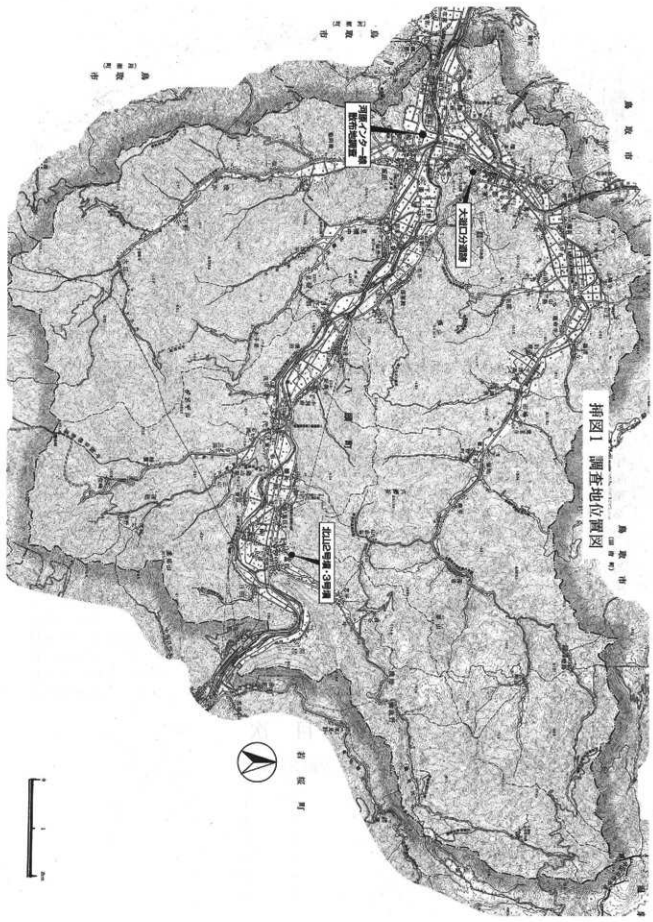
図 版 目 次

図版 北山2号墳1

◇	2
◇	3
◇	4
◇	5
河原インター線1	
◇	2
北山3号墳1	
◇	2

大盗口分遺跡1

◇	2
◇	3
◇	4
◇	5
◇	6
◇	7
◇	8



挿図1 調査地位位置図

1. 調査地
 2. 調査地
 3. 調査地



北



◎ 北山2号墳発掘調査

1 発掘所在地と原因

八頭町立丹比小学校の北約500mあたりに北山という部落がある。

この北山部落には、これまでに9基の古墳が確認されている。

本調査地は、北山字野ノ前582番地（以前の小字は、六郎谷とっていた）であり、旧八東町遺跡分布図ではNo.33である。

八東町誌「考古学的事実」の文中に、次の様な文が見える。

＜「六郎谷古墳」。六郎谷古墳は、昭和52年3月、ほ場整備事業にかかる、北山、志谷間農道施設工事にあたって発見された第2号墳をもって代表とするものである。

この地域は、山すそのなだらかな果樹園地で、第2号墳は表土6、70センチを取りのぞいた地点で、玄室の壁石の上端を発見し、更に土を取り除いたところ、巨石で囲われた古墳の石室が現われたのであった。＞

部落の古老に当時の状況を聞くと、もともとこの地はなだらかな傾斜地であり、段々畑になった畑地であったという事である。

現状を見ると、かなりの傾斜をもった鷹山が北側に位置しており、六郎谷が形成した扇状地的な要素をもっており、古墳にかなりの巨大な川石が使用されている事、又、河岸段丘の要素で現細見川が隣部落富枝でなく北山部落の南側を流れ、1つ山と呼ばれている山にあたり曲折して南下していたのではないとも推察される。（挿図1 調査地位置図参照）

発見当時なぜ調査されなかったか疑問が残るが、重機で玄室、羨道内の土砂は一度取り除かれた埋めもどしされたものである。ある程度古墳の規模とか掘出された遺物等は、町誌内に写真が収録され、教育委員会に保管されている。

2 調査の方法と概要

この辺りは、前述の如くは場整備により段々畑であったものを削平し、ある程度の面積をもつ平面的に改良された土地である。

その削平中発見された古墳であるが故に、調査をせず埋めもどし、そして丁寧に付近にあった川石を墳上に集め土を盛り上げて放置してあったものである。（図版北山2号墳1-①②）

小山は、高さ1.4m、面積、長径約9.5m、短径約7m、面積約64㎡であり、最上部に栗の木が植えてある。

先ずこの小山に、東西南北、巾1mのトレンチを設定し掘削した。

中心部のあたりにかなり大きめの川石が見えはじめ、ほとんど川石が無作為に積まれている。（図版北山2号墳1-③④⑤）

小山状に作られた山を取り除き周囲の畑と同じような高さ（H=172.648）まで掘下げると、玄室右側壁の巨石頭部分が見えてくる。（図版北山2号墳1-⑥）そしてさらに掘削を進めると、玄室正面の巨石の頭部分（図版北山2号墳2-①）玄室左側の石組み（図版北山2号墳2-③）が確認できる。

玄室の土砂、羨道の土砂、周囲の土砂は前に埋めもどされた土であるため層はなく比較的やわらかく掘りやすいものであった。

先ず周囲を掘削し次に古墳内部の土を取り除いた。(図版北山2号墳3-①②③④)

周囲、内部の土を除くことによって2号墳の全容が見えてきた。(図版北山2号墳3-⑤⑥)

天上石はなく、玄室の正面と右壁に大きな山石を配し、他はかなり大きめの川石を配している。

片袖式の横穴式石室であり、全長7.2~8mの古墳である事が伺える。

玄室の規模は奥行約2.3m、横巾は約2.2mのはほぼ正方形をなしている。羨道巾は約1.2~1.3m、石積みで確認された左壁は約5.3m、右壁は約3.5mである。左右が不揃いであるが、前工事の時かそれ以前に破壊されたものであろう。(挿図2 北山2号墳石組図)

ここで町誌を再び引用する。

〈発見当時、玄室は直径50~80センチの川石や土で埋っており、すでに蓋石はなく、内部には人骨も認められなかったが、次のような埋葬品が出土した。

皿、水差など須恵器16点。特製の直刀2点。鉄斧3点。鉄鉞1点。鉄鋸1点。玉頸2点。

玄室の規模は、タテ2.4m、横2.35mでほぼ正方形、高さ1.58m、南東方向の平野部に向かって、巾1.3mの羨道が続いている。

玄室の正面と右側の側壁は、厚さ50~60センチもある大きな一枚石が使われており、左側も下半分は大石が使っている。かなり大規模で風格のある石室となっている。

蓋石は失なわれているけれども、円墳の横穴式石室と判定されるものである。

出土品によって古墳時代の後期、即ち7世紀前半のものだと推定されるのであるが、玄室の規模、埋葬品の中に両刃の鉄鋸や玉頸があることなどによって、可成の勢力者の墳墓であることは確実である。…〉

この度の発掘では、長頸壺2点、把手付椀1点、平瓶2点、蓋杯1点、高杯1点、甕1点(口部分破損)、皿2点、破片数点、いずれも前回掘り起こされた時、目にふれないで残されたものであろう。(図版北山2号墳4・5)

出土した遺物は羨道入口付近に集中しており(図版北山2号墳4-③④H=171.560)、長頸壺が1点だけ羨道左奥、玄室との境あたりで確認された。(図版北山2号墳4-①②H=170.445)

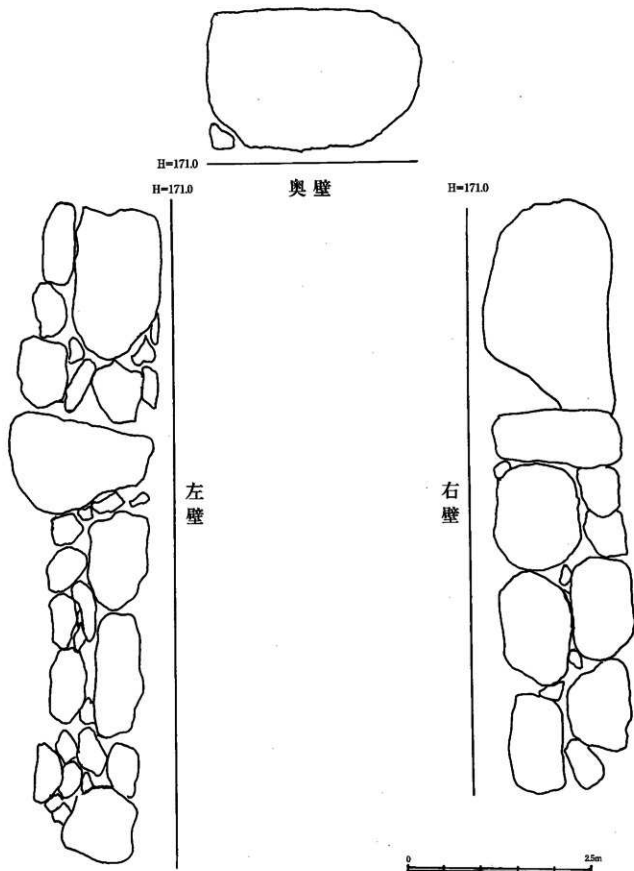
この古墳の特徴として上げるとすれば

1. 非常に大きな川石を使っていること。
2. 古墳の底面が羨道から玄室に向って下っていること。
3. 斜面でなく平面上に造られていること。

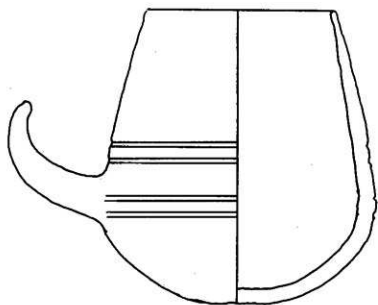
などである。

発掘作業開始は平成18年10月3日、終了は11月2日であった。

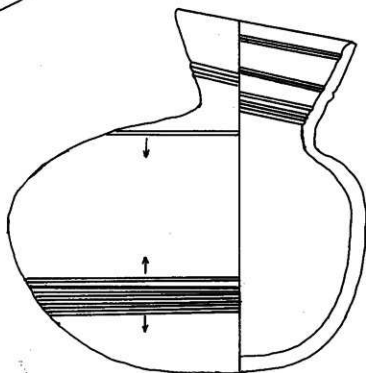
挿図2 北山2号墳石組図



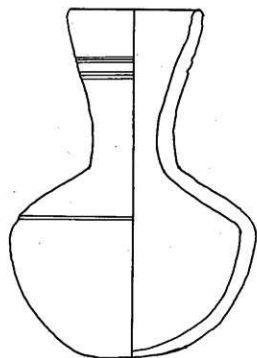
挿図3 北山2号墳出土遺物



把手付甕



平瓶



長頸甕



◎ 河原インター線発掘調査

1 調査原因

鳥取自動車道河原インターチェンジに通じる、国道29号線、西御門地内からの取付道路建設にあたって、建設地に土器類の散布が見られるところから、発掘調査の必要性が生じたものである。

2 調査方法と結果

調査地は因美線沿いの約300mの地点である（挿図4 河原インター線トレンチ一覧表）

そこにT1、2、3、4、5、6の6本のトレンチ（2m×10m）を設定し、調査することとした。

結果は6本のトレンチすべて、遺物は検出されなかった。

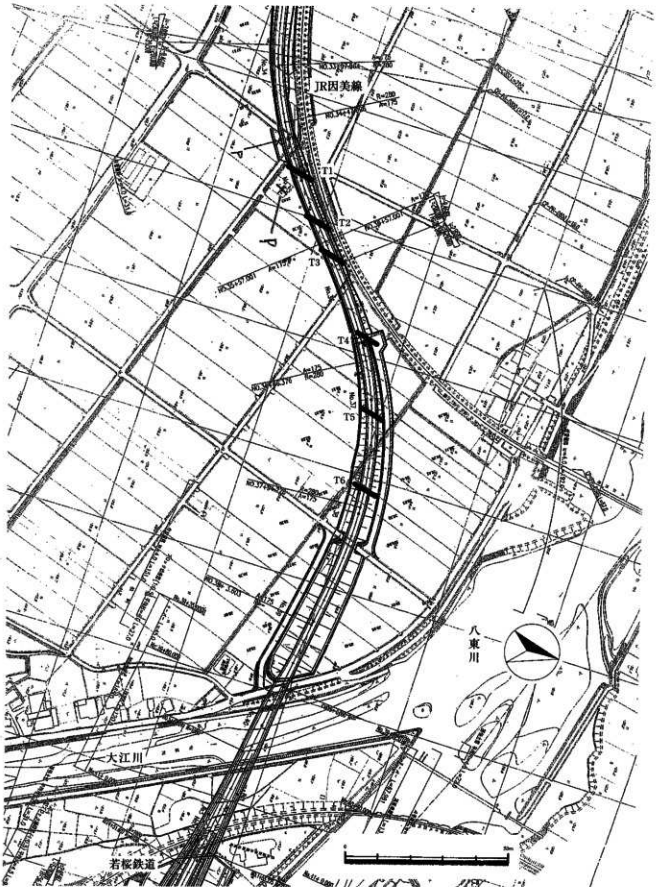
関係者に話しを聞くと、この辺りは、昭和52年から63年にかけては場整備が行なわれた田であり、その時搬入された土は佐治方面から運ばれて来たものであるという事で、その運ばれて来た土砂中に遺物が混入していたものと推察できる。

また、いずれのトレンチも、底部約1mのあたりから砂礫の混じった層が見られる。この事から以前は八東川の河原ではなかったかと推察できる。

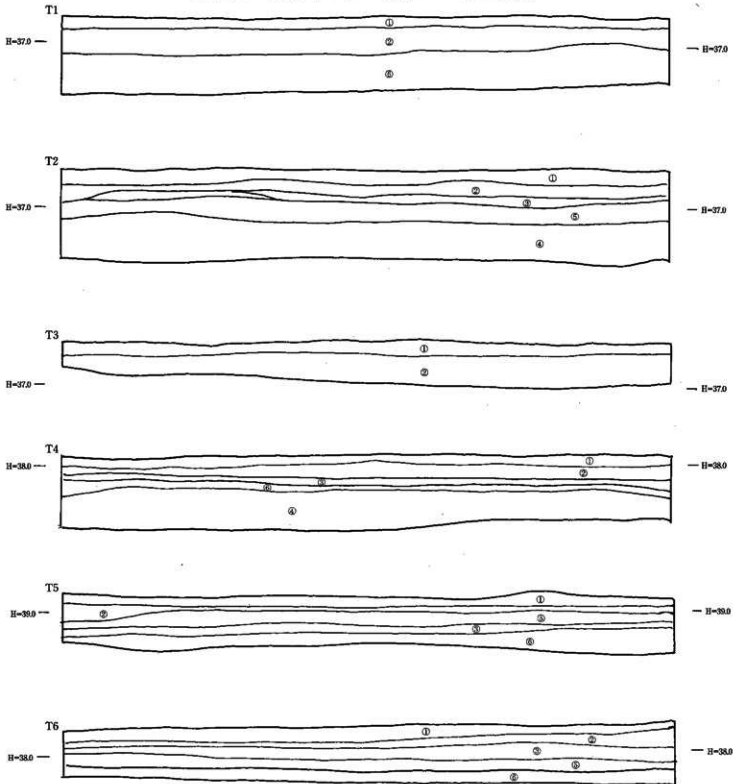
特にT2では底部はヘドロに近い粘質土層であった。（挿図5 河原インター線トレンチ土層図 図版河原インター線2-②）

作業開始は平成18年10月30日、終了は11月16日であった。

挿図4 河原インター線トレンチャー一覧表



挿図5 河原インター線トレンチ土層図



- | | |
|-------------|-----------|
| ①表土 | ⑤粘質土(黄褐色) |
| ②耕作土(にぶい褐色) | ⑥砂礫(暗褐色) |
| ③床土(黄褐色) | |
| ④粘質土(褐灰色) | |



◎ 北山3号墳試掘調査

1 調査原因と方法

北山3号墳は、昭和52・53年度に実施された「町道北山志谷線改良工事」に伴って発見されたものであり、当時は当該箇所を道幅を狭くして古墳への影響がないように工事を終了していたものである。しかし、当初の予定道幅（4.6m）に対し当該箇所は極端に狭く（約2m）なっており、工事終了後から再三、道路拡幅を求める地元要望が提出されていた。

この度、これまでの再三の地元要望に応えるために改めて「町道北山志谷線改良工事」が実施されることとなり、当該箇所の道路を拡幅することが決定したため、古墳の範囲を確認するための事前の発掘調査を実施することになった。

調査は、平成19年8月1日より始め、8月8日に終了した。

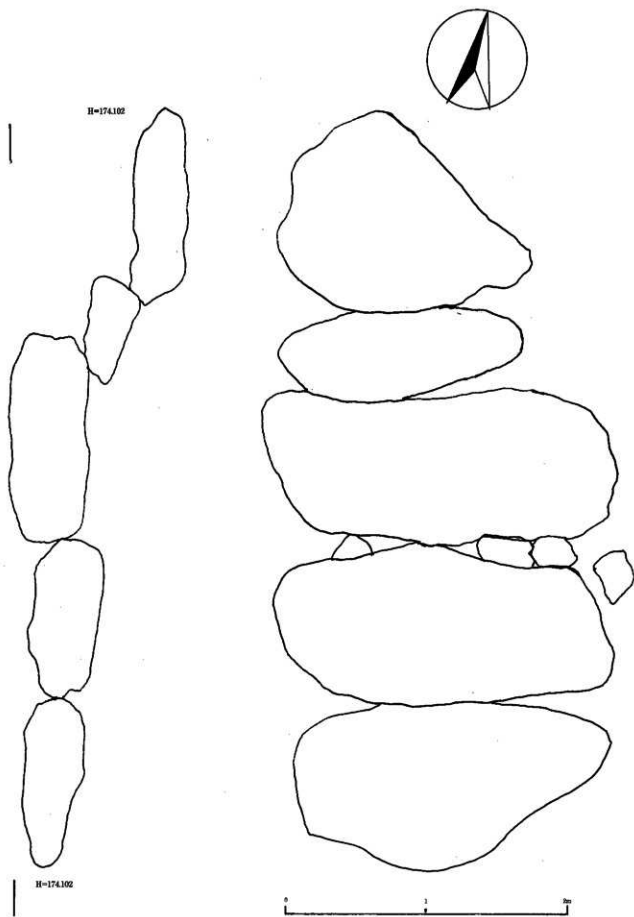
まず最上部と考えられる（図版北山3号墳1-①②）から2×10mのトレンチを設定し、表土を掘削した。

掘削の結果、5個の巨石を確認する事ができた。（図版北山3号墳2-④⑤）

巨石の右側は私有地であるので町道側左側を掘り下げると、数多くの川石が張りついている。（図版北山3号墳2-③⑤）

この5個の巨石は、羨道・玄室の天井石である事、町道改良工事により、羨道の先端部分が削り取られる事を確認し、作業を終了した。

插图6 北山3号墳天井石平・断面図



◎ 郡家大盗口分発掘調査

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る過程

大盗口分遺跡

大盗口分遺跡は、八頭町郡家字大盗口分に所在する。東西を南から派生する尾根に挟まれた谷間に位置し、現状は大部分が水田で、一部畑地として利用されている。今回、大東建託より当地域にアパートを建設したいという申請がなされ、八頭町教育委員会は現地踏査を実施した。

その結果、建設予定地南側の畑地において遺物の散布が確認された。また、西側尾根上に円墳2基の存在が知られていることと併せ、調査の必要ありと決定されたものである。

第2節 調査の方法

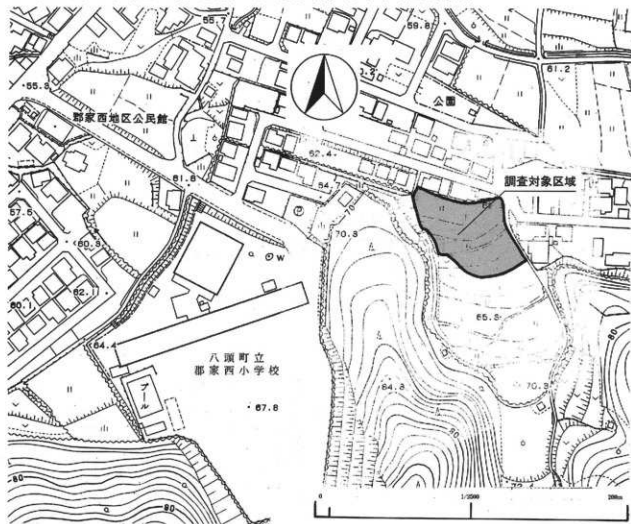
大盗口分遺跡

トレンチは、建物工事により掘削が予定されている建物部分を中心に設定した。アパートが2棟建設される為、それぞれの建物の北西及び南西隅に1.5×8.0mのトレンチを4本設定し、追加で東或いは西側に磁北線を長軸方向にして1.5×3.5mのサブトレンチを設定した。(第8図 トレンチ配置図参照) トレンチ名称は北西側をT-1、北西隅をT-2、南西側をT-3、南東隅をT-4とし、サブトレンチにはそれぞれNSの記号を付した。

発掘作業は平成19年4月25日に開始し、同年5月15日に終了した。総発掘面積は69.0㎡であった。

第II章 調査の概要

第1節 大遼口分遺跡（八頭町郡家字大遼口分）

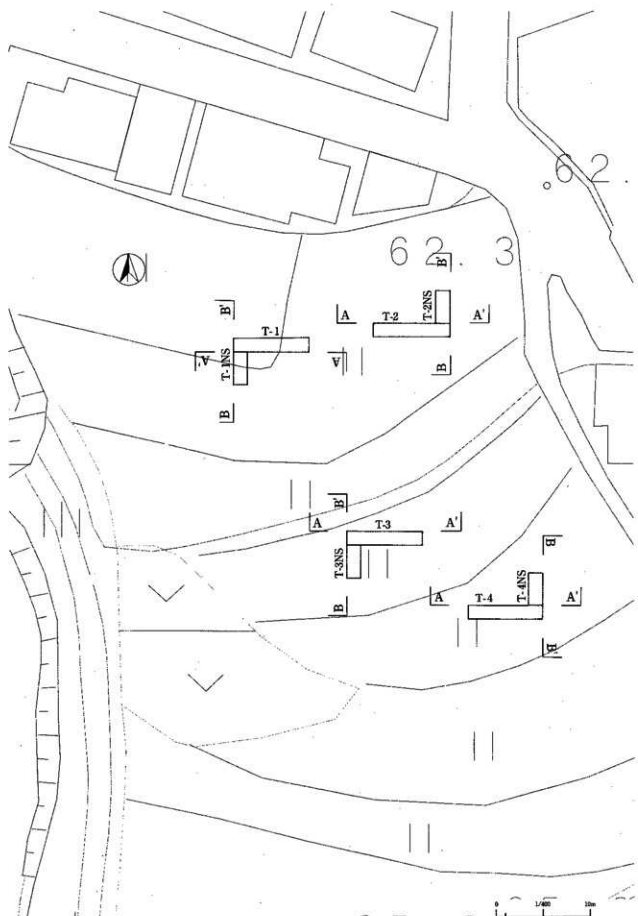


第7図 調査位置図

1. T-1、T-1NS

T-1は、耕作土以下は水平な土層で構成されていた。遺物包含層は、第③層暗灰褐色土層で東側約3m付近から途切れ、西側には伸びておらず、耕作時に削平されたものと考えられる。この層から、須恵器8点、土師器5点が出土した。いずれも小片で、図化には至らなかった。また、耕作土中より弥生土器Polが出土した。口縁端部はやや肥厚して内傾する面を持つ。風化の為詳細は不明であるが、数条の沈線を施していたと考えられる。これらの特徴から弥生後期前葉～中葉のものと考えられる。遺構は検出されなかった。

T-1NSは、T-1西端から南に向けて設定した。南側畦を補強する為、第④層を切って第⑥層を盛土して整地を行なった痕跡が窺えた。遺物包含層は、第③層暗灰褐色土層、第⑦層青灰色土で、第③層は、北端に薄く入るのみである。第⑦層は南側約2.2m付近で途切れていた。T-1と同じく削平を受けていると考えられる。第⑦層から、須恵器5点、土師器6点及び、石器1点が出土した。いずれも小片で図化には至らなかった。遺構は検出されなかった。



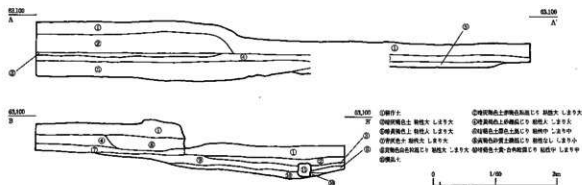
第8図 トレンチ配置図

2. T-2、T-2NS

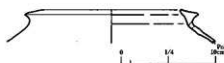
T-2は、遺物包含層第⑤層暗灰褐色土層で須恵器10点が出土した。いずれも小片で図化には至らなかった。黄褐色礫質の地山面を削って近代の暗渠が二箇所検出された事と、ほぼ水平に分布していることから、耕作時大きく地山面が削平され、地形が改変されたものと考えられる。遺構は検出されなかった。

T-2NSは、T-2東端から北に向けて設定した。ほぼT-2と同様の土層構成となっていた。北端から約2.5m付近で第⑥層黄褐色土砂礫混じり層が第②、第⑤層に切られていた。第⑥層は地山風化層であり、削平端部の痕跡と考えられる。遺物包含層第⑤層暗灰褐色土層で須恵器1点、土師器1点が出土した。遺構は検出されなかった。

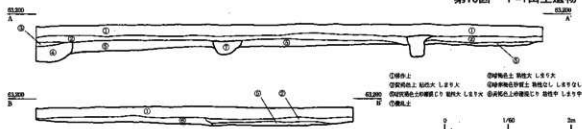
現在T-1、T-1NSを設定した地点と、地表面がほぼ同標高にありながら、地山面が非常に浅く、礫質となっていることから、南東側に延びる尾根が本来、調査地中央部付近にまで達していたと考えられる。



第9図 T-1・T-1NS土層断面図



第10図 T-1出土遺物

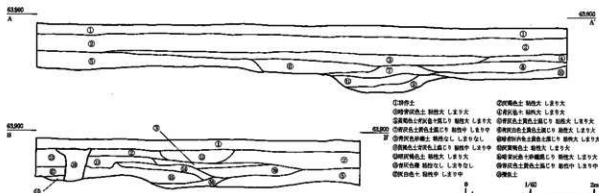


第11図 T-2・T-2NS土層断面図

3. T-3、T-3NS

T-3では、西端から約4.5m～約6.5mの幅約2.0m、標高約62.9m付近で南西から北東に向け流下する流路を検出した。流路堆積層は第⑨層、⑪層であった。また、第③、第⑥、第⑦層で僅かに有機物腐敗臭を発していた。遺物包含層第③層暗青灰色土、第⑥層暗青灰色土黄色土混じり層で須恵器1点、土師器21点、石器1点が出土した。壺口縁部Po2(第13図、図版8-24参照)は、くの字状口縁で外反し、端部はやや平坦気味の丸に収める。同じく壺口縁部Po3(第13図、図版8-24参照)は、くの字状口縁で端部が内側にやや肥厚し、平坦に収める。Po2は古墳後期前半、Po3は古墳中期後半頃のものと考えられる。また、第⑦層下部で腐敗の進んだ木材小片の散乱を確認したが、全てを取上げることは出来なかった。その中で比較的遺存状態の良い棒状の木材5点のみを取上げた。木材は、長さ約10cm、断面形状は、長径約1.0cm、短径約0.7mmのやや楕円形を呈していた。明らかな加工痕は確認できなかった。流路の直上層に位置することから、上流から流下したものが堆積したと考えられるが、詳細は不明である。遺構は検出されなかった。

T-3 NSは、T-3西端から南に向けて設定した。南端から約0.1m～約3.0mの幅約2.9m、標高約63.2m付近に西から東にかけて流下する流路を検出した。尾根方向からT-3中央部の流路へ流下していたと考えられる。流路堆積層は第⑮層、⑯層であった。遺物包含層はT-3と同じ第③層暗青灰色土で須恵器3点、土師器10点が出土した。遺構は検出されなかった。



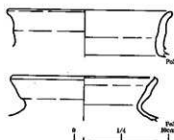
第12図 T-3・T-3NS土層断面図

4. T-4、T-4NS

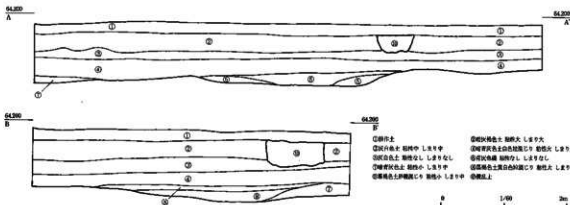
T-4では、東端から約2.6m～約6.0mの幅約3.4m、標高約63.2m付近に南から北に向け流下する流路を検出した。標高と位置から、T-3で検出した流路の上流部に相当すると考えられる。流路堆積層は第⑤層、⑥層であった。第②、③、④層で強い有機物腐敗臭を発していた。第②、③層は、T-3NS第⑬、第⑰層と同じ土層である。遺物包含層第②層暗灰褐色土、第③層灰白色土層で須恵器2点、土師器12点が出土した。また、T-3と同じく第④層下部で腐敗の進んだ木材小片の散乱を確認したが、

T-3出土木材と形状は異なっており、ほとんどが板状木材片であった。これら全てを取上げることが出来ず、その中で比較的遺存状態の良い板状の木材1点のみを取上げた。木材は、長さ約15cm、断面形状は、長辺約3.0cm、短辺約0.2mmの薄い長方形を呈していた。明らかな加工痕は確認できなかった。流路の直上層に位置することから、上流から流下したものが堆積したと考えられるが、詳細は不明である。遺構は検出されなかった。

T-4NSは、T-4東端から北に向けて設定した。基本層序はT-4とほとんど変わらないが、中央部付近の北端から約1.0m～約4.5mの幅約2.5m、標高約63.3m付近に落ち込みを検出したが、性格は不明である。T-4と同じく第④層下部で腐敗の進んだ板状木材の散乱が見られた。遺存状態が著しく悪かった為、取上げには至らなかった。遺構、遺物は検出されなかった。



第13図 T-3出土遺物



第14図 T-4・T-4NS土層断面図

また、T-4 NSでは北側の第②層内に設けられた暗渠裏込め材として使用されていた多数の陶器、瓦片、窯体レンガ、窯道具類を検出した。(図版8—25参照)これらの遺物中には、素焼き状態の陶器、瓦片、製品同士が溶着したもの、窯体レンガ、窯道具類が含まれている事から、調査地西側尾根の突端部、現在前平、整地されて墓地、畑地及び住居として利用されている場所に存在した窯跡に伴う灰原から持ち込まれた遺物と考えられる。現地踏査したところ、窯本体は確認できなかったが、畑地に窯道具の散布が認められた。この窯について文献等は残っておらず詳細は不明である。地元住民の話によると、「正確には分からないものの明治から大正年間にかけて操業し、昭和初期頃に廃業していた」らしく、確実な事として「戦後頃窯跡は完全に消滅していた」ということである。検出した遺物を検討すると、日下部窯跡出土窯道具類よりも発展した形状のトチン、穴あき敷板が含まれている事、棧瓦が薄く、やや小ふりに変化している事等から時代がやや下るものと考えられ、おそらく明治中期以降のものではないかと推測される。

今回検出した遺物は、窯跡からではなく暗渠用として二次的に転用されていたものである為、考古学的見地に立てばあくまでも参考資料程度の遺物といわざるを得ない。しかし現在窯跡本体が失われ、現存する製品、操業を示す遺物、文献などが全く確認されていない以上、八頭町内の近世生産遺跡を考える上で、十分検討に値するものであると考えられる。

以下に大造口分遺跡トレンチ結果を一覧表にまとめた。

トレンチ名	規模 (m)	遺構	遺物	備考
T-1	1.5×8.0	なし	須恵器 8点 土師器 5点	弥生土器 1点(後期前葉~中葉)
T-1 NS	1.5×3.5	なし	須恵器 5点 土師器 6点 石器 1点	
T-2	1.5×8.0	なし	須恵器 10点	
T-2 NS	1.5×3.5	なし	須恵器 1点 土師器 1点	
T-3	1.5×8.0	なし	須恵器 1点 土師器 21点 石器 1点 木材 5点	古墳中期後半 1点、後期前半 1点
T-3 NS	1.5×3.5	なし	須恵器 3点 土師器 10点	
T-4	1.5×8.0	なし	須恵器 2点 土師器 12点 木材 1点	
T-4 NS	1.5×3.5	なし		近世陶器、瓦 32点 窯道具 18点

表1 大造口分遺跡トレンチ結果一覧表

参考文献

- | | | |
|--------------------|----------|------|
| 「鳥取県生産遺跡分布調査報告書」 | 鳥取県教育委員会 | 1984 |
| 「八東町遺跡緊急発掘調査概要報告書」 | 八東町教育委員会 | 2003 |
| 「日下部窯跡調査報告書」 | ◇ | 2004 |

版 圖



①発掘前全景



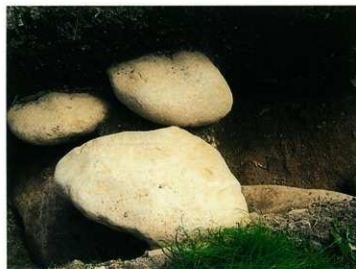
④小山の石



②発掘前全景



⑤小山の石



③小山の石



⑥玄室（右壁）巨石の隅部分



①玄室奥壁の巨石頭部分



④玄室左袖石



②玄室の上部



⑤玄室奥壁



③玄室の上部



⑥玄室右壁の巨石



①右壁の積石と羨道部分



④羨道左壁



②玄室から羨道を見る



⑤2号墳全体像（北より）



③羨道右壁



⑥2号墳全体像（東より）



① 羨道奥部分で出土した長頸壺



④ 羨道右入口付近で出土した蓋杯の蓋



② 羨道奥部分で出土した長頸壺



⑤ 羨道入口付近出土の土器類



③ 羨道入口付近出土の土器類



①把手付椀



④蓋杯と高杯



②平瓶



⑤皿



③長頸壺



⑥臚



① T1発掘前全景



④ T4発掘前全景



② T2発掘前全景



⑤ T5発掘前全景



③ T3発掘前全景



⑥ T6発掘前全景



① T1発掘後



④ T4発掘後



② T2発掘後



⑤ T5発掘後



③ T3発掘後



⑥ T6発掘後



① 3号墳全景



④ 表土除去後



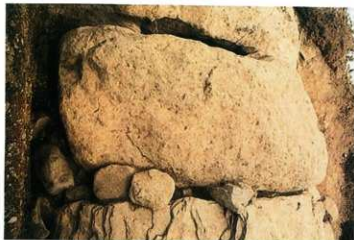
② 3号墳全景



⑤ 上部より3番目の巨石



③ 表土除去後



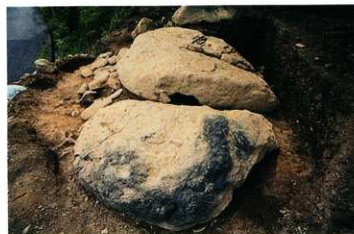
⑥ 上部より4番目の巨石



①上部から5番目の巨石1—②に見える
手前の石



④巨石全景



②下2個の巨石



⑤巨石全景



③下3個の巨石



⑥上2個の巨石

① T1 設定状況
(西より)



② T1 完掘状況
(西より)



③ T1 土層断面
(北面より)





④ T-1NS完掘状況
(北より)



⑤ T-1NS土層断面
(北東より)



⑥ T-2設定状況
(西より)

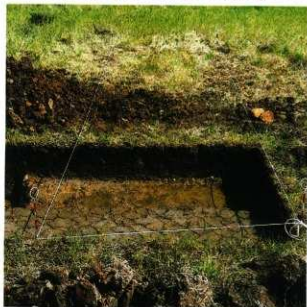
⑦ T-2 完掘状況
(西より)



⑧ T-2 土層断面
(北東より)



⑨ T-2 NS 設定状況
(南より)



⑩ T-2NS 完掘状況
(南より)



⑪ T-3 設定状況
(西より)



⑫ T-3 完掘状況
(西より)



⑬ T-3土層断面
(南東より)



⑭ T-3 N S 設定状況
(南より)



⑮ T-3 N S 完掘状況
(南東より)



⑯ T-4設定状況
(西より)



⑰ T-4発掘状況
(北西より)



⑱ T-4土層断面
(北西より)



⑱ T-4N S 設定状況
(西より)



⑳ T-4N S 陶器類検出状況
(北より)



㉑ T-4N S 完掘状況
(南西より)

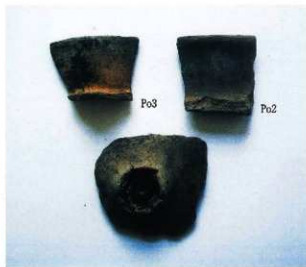




㊸ T-1 N S 出土石器片



㊸ T-3 出土石器片



㊸ T-4 出土遺物



㊸ T-4 N S 出土竈道具

報告書抄録

ふりがな	へいせい18・19ねんど ちょうないいせきはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	平成18・19年度 町内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	八頭町文化財調査報告書							
シリーズ番号	1							
編集者	道谷 富士夫・上田 哲夫							
編集機関	鳥取県八頭郡八頭町教育委員会							
所在地	〒680-0601 鳥取県八頭郡八頭町北山63-1 TEL(0858)84-1232							
発行年月日	平成20年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北山 2号墳	八頭町北山 字野ノ前	313297	33	35°21'46"	134°21'35"	2006.10.03 / 2007.11.02	64㎡	農地造成
河原 インター線	八頭町船岡 字幸河宮		34	35°23'36"	134°14'32"	2006.10.30 / 2006.11.16	120㎡	河原インター線予定地
北山 3号墳	八頭町北山 字六郎谷		34	35°21'47"	134°21'36"	2007.08.01 / 2007.08.08	30㎡	町道改良工事
郡家 大益口分	八頭町郡家 字大益口分		34	35°24'39"	134°15'11"	2007.04.25 / 2007.05.15	69㎡	アパート建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
北山2号墳	古墳	古墳時代		古墳		把手付椀・長頸壺・平瓶蓋杯・高杯・磁破片数点		
河原インター線	散布地							遺物なし
北山3号墳	古墳	古墳時代		古墳				遺物なし
郡家大益口分	散布地					土師器・須恵器の破片数点		

町内遺跡発掘調査報告書

平成20年3月 印刷・発行

発行 八旗町教育委員会

印刷 中央印刷株式会社
